

## カラホト出土マスペロ文書No. 四七八について

— 未宋改元刻『千金方』の存在 —

小 曾 戸 洋

はじめに

一九一七年五月、第三次中央アジア探險の一環としてカラホトを訪れたイギリスのオーレル・スタイン卿は、八日間にわたり発掘調査を行なった。この第三次探險で得た木簡残紙は計六〇七点。その解読・研究はフランスの中国学者アンリ・マスペロに委ねられ、マスペロの獄死後、公刊された。

このうちの一つに印刷本医書の残紙がある。マスペロはその何物たるかに気付かなかったが、筆者はこのたび同残紙が『千金方』の一部であることを特定し、しかも従来存在の知られていない版種であることを確認した。『千金方』の書誌研究上、あるいは西域出土文書研究上いささか有意義な知見と思われるので、以下に報告する。<sup>(一)</sup>

カラホト

カラホトは漢字で黒城もしくは黒水城と記され、中国甘肅省北部エチナ川の東に位置する中国中世の古城趾である。近世その存在は忘れ去られたが、十九世紀末から二十世紀初にかけて欧州の探險家——ロシアのポターニン、コズロフ、イ

ギリスのスタインらによって調査・発掘され、明らかにされた。すなわち、カラホトはタングート族によって作られた西夏(一〇三八—一二二七)のとき出現した都市で、ジギスカンによって陥落されて以降も亦集乃(エチナ)として繁栄したことが知られたのである。このことは元代の遺品が出土することによって確認せられる。マルコポーロも当地を訪れたことを記しているが、やがてカラホトは十四世紀末に流沙の中に埋没する。

マスペロ No. 四七八

スタインが第三次中央アジア探険の際発掘したカラホト出土文書の研究は、先述のようにフランスのマスペロに委嘱された。その成果は『LES DOCUMENTS CHINOIS DE LA TROISIÈME EXPÉDITION DE SIR AUREL STEIN EN ASIE CENTRALE (スタイン卿第三次中央アジア探険中国文献)』というタイトルで戦後一九五三年、ロンドンから出版された。同書には三種の医学文献が載せられているが、<sup>(12)</sup>ここで問題とするのは同書一九七頁所載の No. 四七八と番号づけられる紙片である。

マスペロの説明によると、同紙は印刷本で縦九〇mm、横七〇mm。次の文字があるという。

……○弦即胃痺而痛所○○○／……胃痺心痛者以其○○○／……○

胃痺喘息之病欬唾背痛／……萋湯主之

……半斤生薑兩枳殼兩／……服一升日三……

噎寒習人如痒喉中渋燥／……參○○○○半

未宋改『千金方』との同定

カラホトから出土した漢字版本の医書といえ、まず宋元の刻本とみてよい。しからば現伝の諸テキストと照合すれ

ば、これを特定できる可能性がある。筆者はこのように考え、作業を行なったところ、『千金方』の一部であることを認めた。版本特定にあたって、まず『千金方』の版本系統について触れておく必要があるので、以下簡単に説明する。

- ..... ㉑ 唐写本.....
- ..... ㉒ 北宋林億ら初刊本.....
- ..... ㉓ 南宋紹興刊本.....
- ..... ㉔ 元刊本.....
- ..... ㉕ 後代流布諸版本.....
- ..... ㉖ 南宋未宋改坊刻本.....
- ..... ㉗ 覆宋未宋改元刻本.....

図 a 宋改本『備急千金要方』卷十三胸・第七の首

論曰背痺之病令人心中堅結痛急痛肌中若痺絞急如刺不得伸仰其背削皮背痛手不得把背中痛幅而痛短氣欬引痛咽塞不利習習如養伏中乾燥時欲嘔吐煩悶白汗出或微引背痛不治之數日殺人論曰夫脈當取太過與不及陽微陰弦則背痺而痛所以然者責其極虛故也今陽虛知在上焦所以背痺也痛者以其人脈陰弦故也平人無寒熱短氣不足以息言實也治背痺心中痞氣結在背背滿脇下逆搶心枳實薤白桂枝湯方

枳實四兩 厚朴三兩 薤白斤

枳實四兩 桂枝兩

右五味以酒以水七升煮取二升半分再服明四時服白

枳實四兩 薤白斤 半夏州

生薑一斤 枳實四兩

右五味以酒以水七升煮取四升服一升日三服

㉘ 日本古鈔零(真本千金方)

右の系統図はそのあらましである。(四)(五)著わされた『千金方』全三十巻は、㉑唐写本によって書き伝えられ、いつしかいくつかの異本を生じた。北宋に至り、林億ら儒臣は勅を奉じ、国家に伝わった数種の異本を校勘し、定本を作製して一〇六六年にはじめて『千金方』を刊行した。㉒のいわゆる北宋大字本(『備急千金要方』)がこれであるが、現存しない。次いで小字本ないしは元祐本(一〇八六〜一〇九四)が刊行されたことが知られるが、これも伝わらない。南宋紹興(一一三一〜一二六二)中に至り、元祐本を介したか否かはともかく、その翻刻本が出た。㉓である。これは後修本が唯一わが国の歴史民族博物館に現存する(重文・旧米沢本)。宋刊本に次ぐ古版本に元刊『重刊孫真人備急千金要方』がある。㉔としたものがそれで、日本・中国・台湾に六点ほどのいずれも同版本が伝存している。現在流布している『千金方』のテキストは『道

図b 未宋改本『新雕孫真人千金方』（静嘉堂本）の当該部分<sup>(九)</sup>



蔵』所収九十三巻を含め、すべて林億ら宋改本に由来するものである。

ところが宋改本とは別に系統を異にする二種のテキストがわが国に現存している。一つは⑥の南宋坊刻本で、明治三十九年、陸心源陌宋楼より静嘉堂文庫に将来された『新雕孫真人千金方』<sup>(六)</sup>、一つは⑦江戸医学館旧蔵、宮内庁書陵部蔵の古鈔本『千金方』<sup>(七)</sup>である。これら二種は、林億ら原刊本以前の古写本から派生していることは明白である。本稿では北宋校正医書局の林億らの改訂（宋改）を経ないこの種のテキストを未宋改本と称する。

筆者はマスペロの報告した残文を頼りに、現存する元以前の医学版本の目ぼしいもの——たとえば宋版『外台秘要方』など——と照合を試みたところ、まず前述の宋改④南宋版『備急千金要方』や⑤元版『重刊孫真人備急千金要方』の巻十三、胸痺第七の首に類文のあることを見出した。すなわち図のaに傍線をもって示す部分であるが、<sup>(八)</sup>字句も細部において多々異なるうえ、字詰の關係からしても当残紙に同定することは不能である。

そこで次に未宋改⑥南宋版『新雕孫真人千金方』の当該部分と比較したところ、果たして図bに示すごとく、当残紙の文字をあたかもジグソーパズルで埋めるように合致することが判明した。もはや当残紙を未宋改刻本『千金方』に同定することに疑いの余地はなからう。

しかし当残紙をただちに⑥南宋刻本、すなわち静嘉堂文庫蔵未宋改本と同一版本とすることはできない。何となれば、

図c 『敦煌宝蔵』第五十五冊所収、碎片〇七九号の写真  
 (右上第二番目がNo四七八に該当)



⑤では「生薑四兩枳殼二兩」となっているのに対し、マスベロは「生薑肆兩枳殼貳兩」と報告しているのである。

ところで、筆者は前記の事実気付いてよりのち、マスベロの報告する当残紙が、最近出版された『敦煌宝蔵』第五十五冊所収、碎片〇七九号の写真一片中に載せられていることを知った。わずかに二cm弱四方に縮小されていて、きわめて不鮮明なものであるが(図c)、ともかく形状は図bと相似で、さきの推定が正しいことが裏付けられた。この『敦煌宝蔵』所収の写真でも、⑤の「四」「二」の文字が「肆」「貳」となっていることが確認される。

以上の諸事実によって次の推論が可能であろう。

一般に医方書における処方量の度量衡数字は、宋版では壹・貳・参・肆……の繁体漢数字が用いられることが多い。これはいうまでもなく誤伝を避けるための処置である。たとえば前述の③と④の版本の関係がその一例である。版式が全く同一で、数字のみが四→肆、二→貳となっていること、さらにカラホトの歴史を考慮に入れると、当残紙は南宋末から元にかけて出版された⑤の翻刻本と鑑定することができる。おそらくは元刻であろう。

『千金方』——しかも林億ら宋臣の校訂を受けない刻本——が辺境の地カラホトに運ばれて当時読まれ、全三〇という巻冊(おそらく七〇〇余葉あったと推定される)のうち、わずか半葉にも足りぬ小片が流沙の中に埋もれて残り、それが今日われわれに新種の版本の存在を証明してくれたのである。

ま  
と  
め

一、スタインが今世紀初カラホトで発掘し、マスペロが解読した印刷医書の残片(№四七八)は『千金方』の一部分である。

二、右の『千金方』は静嘉堂文庫に唯一現存する南宋改南宋版『新雕孫真人千金方』の同版本に基づく元(もしくは南宋末)の翻刻本の卷十三第十四葉表の下半部と認められる。これは従来存在の知られていなかった新種の版本である。

謝  
辞

西域出土医薬書に関する諸資料を惠贈され、本知見を得るきっかけを与えて下さった三木栄博士の御厚情に深謝の意を表す。

注  
お  
よ  
び  
文  
献

(一) 本稿は昭和六十一年七月の日本医史学会例会(於順天堂大学医学部)で発表した「敦煌・黒城出土文書に関する新知見三種」『明堂経』『千金方』『崔氏方』と題する講演のうち、『千金方』に関する部分をまとめたものである。その他『明堂経』に関する部分はすでに拙稿『敦煌文書』中の医薬文献(その4)、『現代東洋医学』第八卷一号(一九八七)、また『崔氏方』に関する部分は『敦煌文書』中の医薬文献(その2)、『現代東洋医学』第七卷二号(一九八六)で若干ふれてあるので、ここでは省略した。

(二) 三木栄「西域出土医薬文献総合解説目録」、『東洋学報』第四七卷一号(一九六四)に紹介せられている。

(三) マスペロはこのように「人」の字に解するが、誤り。後述の結論および図bからして、これは「ミ」、すなわち上字の「習」を重ねる記号とみるべきである。

(四) 宮下三郎「宋版備急千金要方について」、『米沢善本の研究と解題』、ハーバード・燕京・同志社東方文化講座委員会(一九五八)所収。

- (五) 小曾戸洋「千金方と千金翼方」、『現代東洋医学』第五卷二号(一九八四)。
- (六) 同書は黄丕烈が嘉慶四年(一七九九)に元刻と称される『千金方』の版本を閲検し、宋改を経ない宋刻本であることに気づいて購入した。その後いく人かの蔵を経て陸心源の入手するところとなった。現存部は全三〇卷中、卷一〜五、十一〜十五、二十一〜三十の計二〇卷、残りは元版(卷二十のみは明版)で補配してある。黄丕烈・陸心源らはこれらを北宋刊本と見做したが、筆者は調査の結果、「敦」字の欠筆を随所に検出した。「敦」字は南宋の光宗惇の避諱字にあたるから、一一九〇年代以前のものではありえない。前掲(五)論文参照。
- (七) 永正〜天正年間(一五〇四〜一五九一)にわたって抄写されてきたもの。卷一のみ。天保三年(一八三二)『真本千金方』と題する松本幸彦の模刊本がある。処方のない卷一の零本であるから、ここでは問題としない。
- (八) いま江戸医学館影宋本による。卷十三の第二十一葉、表第三行〜裏第十行。元版も字詰こそ異なるが、字句はほぼ同じ。
- (九) 卷十三の第十四葉表。図bの囲み線は筆者による。
- (一〇) 黄永武編。一九八一年より台湾から刊行。第一〜五十五冊にはスタイン文書が収められる。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室)

## The Significance of Item No. 478 of Maspero's Documents on Sir Aurel Stein's Kharakhoto Excavation

by

Hiroshi KOSOTO

In 1917, as part of The 3rd Central Asia Expedition, the Englishman Sir Aurel Stein visited Kharakhoto and carried out archaeological excavations there for 8 days. A total of 607 fragments of old documents were found on this expedition. These were translated and researched by the French sinologist

Henri Maspero and published after his death. Among these was a fragment of a medical text which had been printed (wood cut).

Although Maspero was not aware of what this document was, the author, after examining, it arrived at the following conclusions:

1. This fragment (No. 478) is from the "Qian Jin Fang".
2. This edition of the "Qian Jin Fang" is from the Yuan period, when it was printed as a reprint of a Southern Sung period edition that was not revised in the Northern Sung period. This fragment is from the first half of the 14th leaf of the 13th chapter. The existence of this printing of the "Qian Jin Fang" was not known up until this discovery.